

聖書箇所：ルカの福音書9章47～50節

説教題：だれが一番偉いのか

1 だれが一番偉いか

(1) 議論

人間の心は実に複雑です。表向きは謙遜な態度を取っていても、心の中はまったく反対のことを思っています。自分のほうがあの人よりもすぐれている、偉いはずだと考えようとします。

弟子たちはまさにそういう状態でした。最初からそうだったわけではありません。例えばペテロです。彼はイエスに出会ったとき、こう言ったのです。「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」(ルカ5:8) 他の弟子たちも同じです。ところが、時間が経つうちにいつの間にか最初の悔い改めの思いはどこかに行ってしまいます。自分のほうがおまえより偉い。そんな思いが心の中を占めるようになりました。どうして変わってしまったのでしょうか。

(2) 高慢になっていく弟子たち

大きな転機となったのは、9章1節の出来事でした。「イエスは、十二人を呼び集めて、彼らに、すべての悪霊を追い出し、病気を直すための、力と権威とお授けになった。」十二人は町や村に派遣され、行く先々で実際にゆだねられた力と権威を使います。そうすると悪霊は大声を上げて逃げていきました。弟子たちは、この力はイエスからいただいたもので、自分のものではない。最初はそのようにわきまえていました。しかし何度も繰り返すうちにいつの間にか初心を忘れていき

ます。この力と権威さえあれば、イスラエルに革命をもたらすことができる。その時はイエスが王の座についていただき、自分たちはその側近になる。そんな夢を思い描くようになります。

そのようにして、いつのまにか高慢がここに忍び寄っていきます。だれが一番偉いのか。つまり、だれが出世街道の先頭に立つのか。弟子たちの関心はそこに集中していきます。

2 「わたしの名のゆえに」と「一番小さくなる」

イエスは弟子たちのそんな心の変化を見逃しません。47節。「しかし、イエスは、彼らの心の中の考えを知っておられて、ひとりの子どもの手を取り、自分のそばに立たせ、彼らに言われた。」

イエスはひとりの子どもの手を取ります。もっと詳しく言えば、「しっかりと抱き寄せた」というほどの意味です。そして、「自分のそばに立たせた」とことばを重ねています。小さな子どもを抱き寄せようとするならどうしなければならぬでしょう。二つ方法があります。一つは、自分は立ったままで、子どもの脇の下に手を入れて抱き上げる。もう一つは、子どもを地面に立たせ、自分のほうが子どものほうにしゃがみ込み、そして抱く。イエスはどちらの方法をとっていますか。「自分のそばに立たせ」とあるので、イエスは子どもの背丈に合わせてしゃがみ込んだ

ということになる。弟子たちはイエスの周りにいて、立ったままだったでしょうから、イエスが弟子たちを見上げるかたちになります。そんな姿勢を取りながら、48 節のこぼを語っています。

「だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れる者です。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れる者です。あなたがたすべての中で一番小さい者が一番偉いのです。」

今見たとおりに、一番低いところにいるのは、イエスと子どもです。ではイエスはこう言いたいのでしょうか。「わたしイエスが一番小さくなっているから、わたしが一番偉い。」まさかそんなはずはない。ではどういうことなのか。

48 節には、「一番小さくなる」ということばと、「わたしの名によって」ということばがあります。なんとなく関係しているようです。でもどう関係しているのかわかりにくい。きょうは、そのことを考えていきます。

3 「イエスの名」

(1) どうして「イエスの名」なのか

まず「わたしの名によって」というところから見ていきます。私たちは、祈りの最後に必ずこう付け加えます。「主イエス・キリストの御名によって祈ります。」「主イエス・キリストの御名を通して祈ります。」どうして「名前」なのでしょう。もちろん聖書的な根拠があつてのことです。ヨハネの福音書 14 章 14 節にこうあります。「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」

しかしそれでもまだわかりません。なぜ

「わたしの名によって求めなさい」と言われるのか。ただイエスの名前を呪文のように唱えればよいということではないはず。そもそも「イエスの名前」は何を指しているのか。

今日の箇所には、この「イエスの名」ということを考える入り口が二つあるように思っています。

(2) イエスの名が指し示すもの

まず一つ目は 48 節です。「だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れる者のです。」

研究者によれば、ここに立っている子どもは、ひとつ前のところに書かれている、あの悪霊につかれて苦しんでいた子どもであろうとされています。イエスによって救われた子どもです。悪霊につかれて何度も意識を失い、口から泡を吹き、からだを爪で引き裂き、血を流し、生死の境をさまよっていました。父親はそんな子どもを救うことができず、ずっとつらい思いをしていました。

イエスは、ご自分の名前によって、この子どもを苦しみから救い出します。イエスが安全なところに立ちながら、助けてあげたのではありません。イエスが代わりにこの子どもが背負っていた苦しみを背負われたということです。そればかりではなく、父親の悲しみをも背負われました。

背負ってどうされたのでしょうか。その先があります。イエスご自身がすでに 9 章 22 節で語っておられます。「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。」

子ども罪、父親の罪、そして私たちの罪を

背負い、十字架で捨てられ、殺される。主は十字架の上で一番小さくなりました。

私たちは、イエス・キリストという名前を聞くと、頭の中で様々なイメージをふくらませます。栄光に輝くイエス。力あるイエス。それが主の名前の指し示すものではないのか。でももしそうであるのなら、弟子たちの信仰とどこが違うのでしょうか。まったく同じではないですか。

だから主は、わざわざ子どもを連れて来て言われたのではないですか。主は、十字架の上でだれよりも一番小さくなる。「イエスの名前」は、そのようなイエスのお姿を示す名前であって、それ以外に示すものはありません。

(3) イエスの名のゆえに子どもを受け入れる

そうしますと、「このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れる者です」と聞いて、私たちはどうすればよいのでしょう。確かに主はこの子どもを受け入れましたが、私たちはどうか。この子どもが味わった苦しみを背負うことはできますか。そんなことできません。ということは、この子どもを受け入れるということなどできないということになる。

がんばれば受け入れられると言うでしょうか。確かに受け入れたつもりになります。でも、ごまかしてはいけません。無理をするなら必ず葛藤に苦しみます。

逆のことも言えます。私たちは「あの人が受け入れられていない」と悩んでいます。「どうして受け入れてくれないのか」と苦しみます。

でも主は何をしてくださったでしょう。主

はこの子どもを完全に受け入れてくださいました。私たちにできないことをしてくださいました。私たちが受け入れてもらえないと苦しんでいても、主は私たちを完全に受け入れてくださるということでもあります。

そうすると、私たちにできる事はただひとつです。私たちが受け入れるのではない。主がこの子どもを受け入れてくださった。そのような主を思い起こしていく。それが「イエスの名によって」に込められた意味となります。

(4) イエスの名によって悪霊を追い出す者

「イエスの名」のことを考える二つ目の入り口は 49, 50 節です。「ヨハネが答えて言った。「先生。私たちは、先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、やめさせました。私たちの仲間ではないので、やめさせたのです。」

ヨハネが言っていることはまっとうなようにも思うのですが、イエスの答えは意外なものでした。「やめさせることはありません。あなた方に反対しない者は、あなた方の味方です。」

どういう意味でしょうか。よく考えると、なんとも皮肉な事実が見えてきます。ヨハネから注意を受けた人物は、イエスの名前で悪霊を追い出していました。それに対し、弟子たちはどうだったのか。悪霊につかれた子どもが連れて来られたとき、だれひとり悪霊を追い出すことができません。念のため言いますが、これは真似してできることではない。イエスが指摘されるとおり、信仰がなければ絶対にできません。

そうしますと、ヨハネが「偽者だ」と指摘した人物、弟子たちよりもすぐれた信仰を

もっていたことになります。弟子たちの仲間ではなかったけれど、信仰はありました。同じ仲間ではないとしても、信仰をもっているのなら味方である。イエスはそのように語っておられます。

今、悪霊を追い出していた人には信仰があったと言いました。どんな信仰だったのかはわかりませんが、おそらくこうだったろうと考えられます。この人は「イエスの名前」を語っていながら、「イエスの名前」が何を指し示すのか、よくわかっていなかった。驚くことに、わかっていなくても、「イエスの名前」を口にしたら悪霊が逃げ出していった。

意外に思うでしょうか。でも私たちも同じではないですか。「イエスの名前」がいったい何を指すのか、よくわかっていたでしょうか。わかっていない。では祈りは聞かれなかったのか。そうではなかった。神はそんな愚かな私たちの祈りを聞いてくださる。まだよくわからないまま「イエス・キリストのお名前によって祈ります」と祈っても、その祈りは確実に聞き届けられていく。もう神のあわれみとしか言いようがありません。

私たちの心には、だれが一番偉いのか。そういう思いが渦巻いています。背伸びをするために精一杯努力しています。子どもの背丈に身をかかめ、しゃがみ込み、低くなっていくことなど思いもよりません。「主の御名によって」祈ってはいませんが、なにもわかっていない。そんな有様です。それでもこのような私たちのために十字架において小さくなられ、もっとも低くなられた主を見上げたいと思います。